

都道府県別賞一等

私の人生にいつも選択肢がある理由

東京都 東京大学教育学部附属中等教育学校 一学年

相澤 李緒奈

私の家族は計五人。昨年定年退職した六十代の父と、働き者の四十代の母、競泳のオリンピック選手を目指し都内の私立中学に通う中三の姉、遊びに夢な小三の弟、そして今年中学生になった私である。両親の年齢差は二十一歳差だ。父の定年後約一年たつが、留守がちだった父の在宅時間が増えた以外、我が家の生活は以前と変わらない。しかし、テレビや新聞では連日、物価高、年金・老後資金問題というお金にまつわる話題が多く取り上げられ議論が絶えない。電車の中吊り広告でもテレビコマーシャルでも「人生百年時代」や「もしもの時の支え」という言葉をアピールした保険商品の宣伝の多さに目がとまる。私はこれを機にお金ということを少し考えてみようと思う。

夏休みの部活帰りのお昼後、ゲリラ豪雨に襲われ駅を出た後、商店街の入り口に店を構える幼馴染の翼くんのお父さんの所に飛び込んだ。奥からおばさんがタオルとジュースを持って出て来てくれた。おじさんが、「ちやいちゃん、受験お疲れ様。陸上部に入ったんだって。」と話しかけてくれた。ちやいというのは私のあだ名である。

「中学はどう。遠くて大変だろ。水泳部か馬術部に入るかと思っていたよ。」
「あら体操部も合っているのに。」

とおばさん。

「翼くん、先週の体操のテスト合格しましたね。跳び箱上手でしたよ。」

と言っている途中から自分の胸の辺りがざわざわして、喉に何かつかえている感じがした。その原因が直感的に何か自分でわかった。父が定年した今、両親の片方が老後生活に入ったこの先も今までと同じ生活ができるかという単純なお金の心配だった。私は小さい頃から多くの習い事をしてきた。スイミング、体操、ピアノ、トランポリン、乗馬、それから中学受験のために小一から塾に通った。そのほとんどを今でも続けていて、姉も弟も同様にやりたいことは全てやらせてもらっている。飲みかけのジュースを一気に飲み干し、勇気を出して単刀直入におじさんに聞いてみた。

「うちって、お金なくなつて貧乏になつたりしないかな。」

おじさんは笑った。奥で書類を見ていたおばさんは余裕そうな顔で振り向いた。

「お父さんが退職して収入がなくなつて不安なんだね。確かにお父さんは仕事柄

第62回中学生作文コンクール

お金が必要だったから貯金が少ないと思うかもしれない。けどこの時代に貯金ゼロで子ども三人を育てるのは難しい。それにお母さんは働き者。みんなの習い事や受験費用を出してくれている。いつどういう状況になるかをしっかり計算した上でお金に働いてもらってきいているからね。」

お金に働いてもらうってどういうことだろう。

おばさんが見せてくれた冊子によると、幼稚園から大学までの必要な教育費は一千万円以上かかることもあると書いてある。例えば、私の住む東京都の最低賃金は千百六十三円である。一日八時間労働ならその乗は九千三百四円にしかならないではないか。明らかに足りない。サラリーマン一人が生涯に稼げるお金には限界があることを教えてもらった。そこで、より豊かな暮らしをしたり、家族の将来にそれぞれの選択肢を残したり、希望していることが万が一の事故や病気等によりお金のせいで諦めなくて良いように生命保険に加入して預けたお金に働いてもらう、つまり、増やしてもらうことで生活にゆとりができることを知った。父も母も将来を見通して保険に加入し、私達の子育てをしながら同時に安心という保障も育ててくれることが分かり、ほっとした。

雨が上がり、店を出て振り返り礼をした目の前の看板には保険代理店と書いてあった。